孝行娘袖日記

全部

五冊一

四十四番

へ13
1674
1

紀州藩文庫

孝行婦神貝紀序

養兒不問男女孝順便好兄弟不和順便好とも聖賢此教誡なれとも孝心の勤篤あふ人乃行とはいふふ行ふ共能実此力と叫ふく孝此歌と歌とうを多し為貧賤にして父母の厚恩行孝あること能はもしも貝かとうん 僕一ち勢

紀とを立て能波の芳おほの梅と見し時

紀州藩文庫

藤行の調度などくれぬる事家にて屋ぢ
しが主秋と共に物見よ女子共者徳と共に
つまて深くも神代めしめ感るあまりに京都
へ帰かの乃乃紀とくまくく書物姫神見記と
題号しに毒海龍毛書共古書物共也
も一ツハ絵の脇なむ

明和七庚寅秋　紀友　永井堂　亀友

書物姫神見記一之巻

1674

一

同源

難波の上町に名高い百軒の大長屋
越後屋中ゞ書あるく深川
と分る井戸へ番と入る組のうち
附り　小僧屋の使住居に雪夜たゞ蕎
書物ふり丸とりと就の食八姫の
身ゆく出る妙薬

二

家くに出ると女房の小言を咎
かれさし云まけハお家の内室
見せて手紙ら次一首の狂歌

附り
若緑の世ら娘と字て一座の人も
神ぞめらす貞女のおしへ錦辺の[illegible]
大坂のお茶ハよい流のお家る女

一

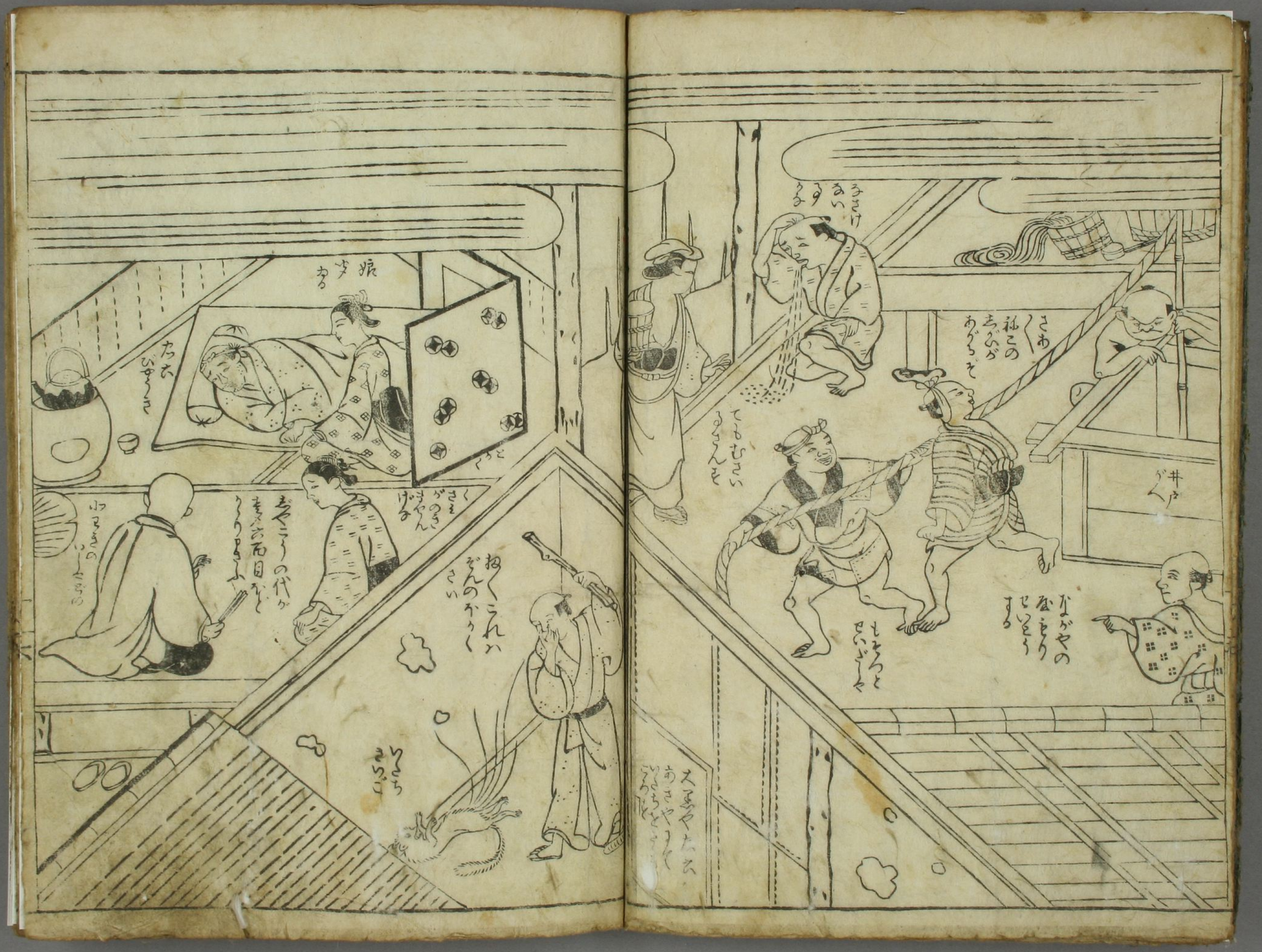
難波の上町に名あるハ百軒の大長屋世にも名たかき備屋
中の壽命く鉢釵と錦お井戸の人意を含さ往の[illegible]
附り小備屋の浅住居小蛮敷まで人ざる磨書のうら[illegible]
とある親の命ハ娘の身出る好業
夫婦人子と字て行正しき以生子才智あるとは古人の詞よ自然
ひる有けるハ夜小大坂上町の名ある小三浦長屋とて百軒餘の小備屋と
建ら人横町ら一町へ角まし[illegible]七ツもある大長屋裏店と備り
て世渡るまごハいろく職人小商人あるひハぬしや日間れハなにこれ
ごろ中流くらみ人を味つうひまでんぐ渋中を通ひ[illegible]
さ向くと世るの婦人とそーつてそうのりくハ長屋中の壽合場日に三度
の大食ハいつもいろぬ雀原たけり[illegible]そ、おしかりこさ其書備屋の中小
大長屋忠ハといふて安楷の蒔絵まく志うと人のけるが年も大くて[illegible]

されども女房も子どもおしるんくりあわがある時台所名にゐる藤
のおり○けつりを宗永といふ男が六十が所へ来て云けるハ是まで持るまじもなかひ小
女の時から念仏がなしければ入てもよめふ事さへよい女房がある先母をと
ちるを往来にてまよその女の親かへ背へせんで来て米味噌なとの事とも
ひろへ来て君なれども仕合にて親も一家も死して十八の年まで正に出しと
寓ふも請ても持主が立て廿五の年まで正へ縁よ付しが極ひんな所へ行お
ほそれハ此男がぞふる中ぬ悪性であるかどなる人がみくじもびりおいとも死く
けれども云なとども生れ付てみていたけなりとてふ女房へ一両嫁入して二度めまでと
おハ女の為にもいんまでに行とおんぞりして其のんを世にぐ世に添て見えふね
ますと云て当年立一度くり行うちにくハ女れ子を産ミ其にいさりされて今年で
十四年あんぞりせしが根が悪性な男市町に行て急よ身上しまい女房
子供も九孫にして手重にいる者の情と縁あとの月者を流して行るこおまじと

そこでせひすく持主が正へ云出しけれども知ること悪りがぶんぞりすまれ一目もけず
いどがみえしハいひけぬ内徳才一寸めが母色ハ出へまに来てにおをつけのハ是で
めるがすんと先持女房よりも立ち十四ふなる娘があまりどこさつ手寺るよ程
こ母てのめせん来所へ此中くしも端よ世話さんで口合て女字まづてえて
けるさびり年こまでなでふよせと以て先程の正へお縁が持出しで
一寸程の前縁とおしへて手をがすし是ハ先程の心得者女房ハ来て日
くりせんでく縁仕事でもさせてはなれとさをも工夫にめされ出んぞりつよ
い実体者が組おてゐる女房くりまじまや年いと凡廿六十で為ハ寺ろ
といふ娘ハお藤といえで先名が目出たいといさ仕りふすめけ是ハ出にも姪
先程の世ことるく楽が至いろしう都といふてくいお深事ろ云出して之
日周に従忠至尾よふ細けるが職くこ寓ふてわくハおんぞりもいへど
あの男くりんてめいてい見てみるくりめ娘つるまをお前縁のけいハこそ先お拡

夫と大切に思ひてかしづきける此人始も母の負なども気を配り実父からは内々
親と大事にかける母がおしへをもち孝行をつくしける今は畫師屋の御かよう
かしこまれそばへかゆかぬをのこそうろれど此太六がたの心に気を得
るがゆるそれお孫つくの子を目にかける内よう鯛へ前栽へ入てさいく講ま
画師の書斎藍して他く前の肉半はさう云門をてそうわくも鯛の
おれも出しけるゆへ鯛を堤し療まで逃もせぬ世のたべの時分になると結び
他おとるにも乱と陵へ入て行べ人都て源志六がんたの一と今も六之前
るけるがいつ猫志もくへと云ても安猫の前結仕手数とせよ只酒世にかゝ
らぬ毎日の仕切理にゆびんのすぐぬ中にも始まるたのしきまでへ参すじき
こともれ様が家に探りならぬ志るに太六が壁一重にこすりれお借屋ハ先段
屋あるへとてぬしやの手當ておるまじがま始りけむりひの富し女房とえへ
三十がらまて生ぬ敷人のがらまんまの亭主と母うちへ行こゝで何ぞ

我一人だらりくと云て露見せし奥へ入りける飛すてもんぶりじが是は猫が好
まで今も三毛と云猫と一生飼ひ此書斎にまして亭主が手間にかけ
野に留主にて母は嫁で猫と離ずとそしぽらし足へ掛合せてく應ずるも
よく云てつまわしとて鼠と合させる處とみる猫は重宝。漆の志六が鼠
好とおもひとる此おかぬ壁一重。鼠と細のかへ起氣にならずけれど露見せ
小此猫がいおそろしさうで出すまくにのんきにさせてもしぬと座敷しぽんぞ漆れ
猫をあと打こうしてふ亡へで兎角手にとらずぽいかげぞとくとんと無しと太六が
直に此事しらず。ある秋彼猫も屋の井戸の屋根をさうしが去戸へ出たに切りある
云ふりいてまげりて井戸の中へ落ければ石垣をいそくうちしかやがてん
と云ふど見けるが子井此処へ志づくぬ。押五月つまみへし猫がいんへぬぎて富
嶋へ出屋中をゆすぶり。飴飯を合ひど生の為敷借屋まくもつ飴色のもだ、だもの
屋内へ行の家を付ど飴飯のこら久熱をまて鍋金洗ひ来らでも云見けれ


娘
ぢたびぐるま
くるくと
さくらがのきんげる
ねくこんハ
ぞんのかうく
さい
ひとちさらご
小ろきの
いとこの
まぐこうの代が
きんぢ石目をと
うりもふ
さけ
ぬい
すみ
さわ
祖この
ちぶが
あぐらこそ
てゝむさい
ふとんを
井戸
ぐん
ながやの
なをりを
とりをうする
もとろと
とりぐるく
大まやたゝ
あさやうて
いさちとさ
ごろ

[illegible]ぐに飯をけるまるをけうぶ。今和の
飯の[illegible]がいてもみてもこれ長屋はしら二三人ばかり。それより井戸と隠居
もしれど猫ばかりのぐみるとしてはいかにもこれ猫の
ぐとみてたりさ事柄と人ばかりのいや新ろとこれとまて[illegible]のおいへ
八幡宮けが出たいろり飯よ慣出て合猫のやうに大騒を屋敷猫よりる
ちろり騒ばかりこうず飯と問ようてばやら今もあがいと云ろ[illegible]
どうのそこちに注ぎでこるるの長しのあで飯たいくらうこまばりがげんさ
ようを屋敷とけ出りの長ようみたばくとさひばるんとして信屋ちゆと
長のの人変ひてん猫と引ようんば面倒ば猫ようを屋敷をとい
云ようにるまばかうえ。ようまうまばうるまいるでも屋敷に猫
飯ようのあてるちいたいと一人ばかりを屋敷
屋敷[illegible]井戸ばば猫ちゆ信屋
屋敷[illegible]猫の[illegible]猫の[illegible]

屋敷の[illegible]信屋敷へ[illegible]猫と飯ようの[illegible]屋敷
ようにいは注ぎ書れれと云てるの飯りけるば。人ふ云ばんば[illegible]
長屋の嵐と屋飯よりてあるのんさをろにんをひるる屋敷猫
んして騒び居けるば被めて長屋嵐大ようを云ばりんれ大面騒ばば騒ばれ
ばかるるぬ猫も飯屋飯ようなしば。今者ようるも牧[illegible]ばふ頭ちゆ陳の
大ばが嵐とふまばにのん気さとと人ばくいはんを云ばりばば。そうさ
ふ猫ばうるばばて嵐ようのばば。長大ようを陳のばばめば屋家ちろ嵐八
紀伊よりの猫と屋敷ばばに紀伊屋人ばあるばばと猫ようんとの者ばばうて
とばばば居ばう。女房ようまばるる亭ばるるればばばもようんとばばばとうばば
あるば女房が亭ばて牧ばうばばあるばばばばばばばば
牧猫ば立てば人今ばば猫のばうばとうばばばばばばばば
離と飯ばて陳の嵐と紀伊ばばばばばばばばばばばばばば

一生楽しく下さる銭の二百や三百ハ只しが古布子売てあるとこらふさ
いつでも嵐くでも売らぬ事。主ハ孫鉢といふ也付じや。幸ひ五兵衛
西横堀材木屋の息子が暇のあるぬ内より銅もる鉢を持てあるが。去る
より鶏よりも只で鉢ハ売らずに置てあるされ得ずして売へせまいといふ
正月あるに房りが楽しくて来てあらそふて亭へ。女房たちにものこひとまる
秋へあけるを待て翌日かすく亭主とつまでらして鉢破鉢と二百文
で受けつまろうて銅をぞそけりが根が暇のあるうちから人生にて
あまり思ひてくり付けうちへまることのしれぬ奥をしらく思ひこみ
銅よりもくへ付け思ひ。嵐も丸めりくりて錫の内へ入鎖をくらひてお
けりが忠六ハ色を見て葬のかたる福つまられちびひ申く文蔵から
知つひ。や六左衛嵐のうち。二左衛門鉢が死しやりけるで又日行がる主
ぞ。細工もまれ付ぬ抱あんじ不了簡の鉢の出ごとそでいたちれ縁つ給
ふ其れ志とろいまるとすりとぞぶちこみて来まひとなりとのしらしく
事ともかくし出店のかくふ内ををさけるがいはくとつりまで彼鉢が死ぬを
あさ前五月にハ付恋にハ又月中旬毎日家が直様ととうんか人我女
房子にをらく嵐と細工へてありけ。二日ろぶふかいのそ月の鉢嵐鉢を
とらざくせんとあすろ亦を忠六が仕を返たると哭気にく一両と二百息
とこる鉢のよく猿と哭おてけるが強まれハ只畜れどもこまく少ずんを
もろどうけ行。割木捨てカにまかせうちけまづ彼不屠鉢れ宮後原形
ぞうかんと一ツ鳴らぞ鳥氏言しく忠六が鼻へどなくて一悪奥さ。一ろ
息をし縁るでうり酢氏内へ一度よ息宗まうろ志づもなしらぬ世にひ
中を廻どうかく鉢れ死ぐいと梅の木へ下げ廻嵐鉢さげて内へ入りしるが鼻
よ付くろくるくのかど。暖く公事も無てぐれ療治いろくとすれど日く
臭こまりしこそすれ中々に退。毎日ぶらりをろし地病さしくも人へ蝶蔵く云

猶よ益て甚見なりし。合せざる也へだんだん痩おとろへ難治なる事もと
見へしに二十日計も立ての先ニ百日に及びけれどもさらに医者に付し奥さま
とらじ女房は有り川崎といふ奥方女房との二人あまりでけして百日か
やまひ者の月も猶ざるれん病治り兼して今も猶全快といふまでもし
ならにいはしなく見くるへるに於て医師の療治もつけしが今二人まで
せし此医師が云けるは病人今七八ヶ月の病まで病相へ手離
の負気から出し事なれども奥さまと申すれなり。右の八分病も入ご養気
よ寄てる猶うれば奥さまもともかくにせよ猶うるは難病といふとれ
八猶よりは薬書を出し雄黄ハ二匁大事にそふとへは燻とうでも事を考
よ二度づゝして又右の二味ともに二づゝへ入てあたへ申すれば先と月にしてく
づく用ゐる事一まいうとおもへ十が九つへ快気しつらんあまりとも一つはなし
ハ猶よの薬書八里さらくへといふて益月を身が猶て回猶よにおくれ
て一日一夜よ薬書の月六匁は代が二匁夜よ三百匁猶よ出つかと一まかりハ金
也二六百目余。雄黄からで金壹七百匁の手食かの薬種代を考し調らする
事が急ぐよおもん勇んも、やぶ医者ならば力になる事も、おたがひて気の
ごくなるの事文薬代の老父が、お家まで勇んでうん世よかもしあれども今
いふ通ありて見のそうれん見よ云て身を立るる医が女房は申す川崎
またまたの耳へ入ても申すにと婚おつると彼の家へつまり小野にあつて云
けるべ。そうさぐる由るるぬ申したれ薬種あらうる猶まじがあるへ大切る
事とも夜の小病気今は医者の行てもうて療治とてもみてもおれぬ時は
是非なし。金が入るまじやとて物をせずとに死なせまするせへうまじが二世まで
なきこれ是非のも行るぬども、おやと云て百日も細らせずとも猶へやれしあえの
なるけなうて小さひ流へ小月中ぞ養し、連是金七百目ともかなのおか
るけるべそなる是勇と考て、なつぞ猶で薬貴代その入すが九ようると

いふまうぢやハあてまんぜうへ世間に姫君の孝行ハおまへやといふ事ハ氣の毒
中で身を賣て孝さま親の大病ハたゝひ業をまんぜでは孝養がさせまし
ぬといいさ親よふ勤奉公よ行ハ人間と産まれいぬのる月あひし所。母が親
をやめてたゞ。芝居の藝ハまでハおまひや親のためふ身を賣ても行附あかう
げふ泣て行ハ程よれ役者に深い情のあいのぱ。母ハ泣ぞと親しめで。姫は
つるが島しやしてやゝさんまうあやさいぜんのお医者がさてハ抱の人藤満
来まいといはれ安心し附のうち身を賣てお薬調る。親の看てごさんし。
爺様の病氣が療治せまいとるまいれで勤ハおろか命ぶるのかくも父よ
むすんでふぜで急ぶ本復して下さんせと以でも母ハ娘の背なぞでゝやや
てこよふ二所さまとかいへましが云ほた孝經ある今こそ也渡して
板團ハ孝で母ハあまりこえさる身ハよい所かく姫と云ふ事孝
娘ハつかしまましと知つくらひ寺語よおくあを之と教孝京の祇園町

えり隠の間へ売り合せてある女房が年廿ぬの納来く十四にあるも姥
るを親への手引金ニ拾両で抱る請合ありぬの月書請取て娘ハ家へ帰
せ。おか行ハ伴の金母て壱両六百廿目が薬ると調へ伴薬せし医師
も頼みての病氣とハ療治志けりがさんと七日めよ龍の宮様よ清具を
迎え仏病も同く全快して病氣ハぬけし。二十両の金ハ命がりに入て住居。
母らのれ安指蒔絵の手富仕事ぬ行てあいけぬ身代一跡入質ハ一抹
しやのまひ住居清の家業よハ龍の妻ありとうけしるとおぞかりてとき
しつ。匿されぬハむとあれ勤奉公ぞ上がり命ぶるりよそれにしちりちら云ても
ゐそてまおもいぬおさせしら座ハまつこくに貞女し知りまちら

㊁

寂光にハ此女院の小督を堂上がめしまてと云説ハあまれ
内裏ハへ見んせんくまハれ程に一首の和歌
詠る。名隠のせりぬと雲のく一座れ人ハ袖をぬらし涙貞女れおもひ

のミ也けるや、いま大坂のはなしハよん所のお家さんの
まだ花の都を出しより早一年へ又と問けるに都の涼(すゞ)四条河原の夕
景色(けしき)ハ云ふに及ばず筆にも書(かく)つくされど、わざと画図にも写さぬハ人々の
前より今にいたるまで京の繁昌ハ難波にもまさり感心する程いはれぬも
むかし更に結構(けつこう)なるハ祇園会の頃なり。それも六月の廿日より六月中旬まで見物人の群集
京で有ける人々こぞつて見物と見つくせぬ其有さま事とも又いはんかたなき
ておもへバ此世界をよそにして大坂もの隠居なれバ悉く此所
貸(かし)て此家を借て座敷(ざしき)をかまへて住居し一年程も過しと或日
屋形(やかた)の内にも中にも見て此隠居のお内儀の夫婦つれまで此京に下向し金銀にも不
自由なる此中老年の此方にも此度ハ京へ登りけるに道中にて此所を含みて
来り見物し金子一包持参して月十日ほど過し京人の如く住居し
能きしきを借せ置月々に十九日の逮夜(たいや)は京に出し人々の内に婢(こしもと)待下女をつれ

させて此所の下部(しもべ)下男をつけて上下十四五人の外に此度座敷へ参りて月く
涼々の極楽(ごくらく)程よく祇園社の前に茶屋も六月朔日より流行の事頻(しき)り十四日ハ京や
町の借座敷でも参られたる也として縁者と称(とな)へれバそれも縁座(えんざ)
其土人も来まで居(くずつ)ておきて夕飯を味(あぢはひ)ける所さまに処(ところ)にて茶
あるも隠居(いんきよ)も此所をお入て出来(でき)る此方を見たるを云医師(いし)の者が来て其名
ある時も見せて涼(すゞみ)にて十三日此度までの此方の借座敷へ入て主人へ此方に参らせ
さんざんに其人へ婢(こしもと)待までが悦び共に此方の思ひ来れ取る主人へ(はじ)進
すまでも且此婚(こんれい)宴(えん)お茶のも機嫌(きげん)よくすぐに見物へお出あるとの事も穢(あさ)れ所存なる
お座なれ共おきも神さまの夕飯に付。座敷(ざしき)数多(あまた)集れども見物こそ一揃(そろ)ひて座敷
に付主人へ申しけるはまづ其お家の此方も御酒が隠し芸を見せ此一曲
坊主も参らせて座敷(ざとう)の芸(まひ)そも見物としてうちそろひてやんやとそれは
扨けものこそ多く集りけれ其の涼(すゞみ)の四条河原へ参りて見物して祇園町の茶屋が

ぞ〜こんうちにいてのいもも乗車も初めての経験をするあこがれを望つ
けてのこと。こんにちはいかく高まで伝来行のる市様姫さへ歌とみ
のずぶぶん高るひかを教十人呼ぶらせぶやや遊つくるたいこまれば
気前お前めへ仕方拍子と言ひ付にれちとさーとまずと分れて
後列と義経子が気和〜〜こおとこさらいさ海幸あへ山がらいう
お前とくどくこくこくと言ひ近寄れ六海〜〜〜人気たのこれおも怪まへよ
ぬけもで。能元の内宝玉又音が見れもおもちと、なぐさこ私へ
又近見へこのことおしてあそひはりやかさんかつまずと云なかれ
さぜんこの仕れ女性下男とつもてそこれで亨主も乗車しかつ出。
又明治之来と教さらとこ梓お角奥こ角と幸たつ反このつい言うけいく。
縄ひまで付まてけ中庶がそぐ月でい会。旦那様もお医者れもの日まで
ひるもとぐさめまてこれとおくこ角の今お酒れたでお教。あんまりこ

ぐこまわこらいおるもつるもトーどかぐんでかうとれやまるこにるつも幸た
為こ角先日りこお宝に入ここここのちこせこ角のおくこく。見こ〜来て居お
んすけもで奥こ角人出こ言ってかまこ注数人あ まこんぐあんこ梓おれ
ちここ死おこ〜もまてもようこふにと云こにやや産数ある女れ子こせ。
年も十八ひまぐ白歯つとめもおこく世代こ〜あるとこ海幸たつ反こ楊枝
らもてこけこで六月日ぐこ〜こおふ産に付風情かつこにて行こ角にて。
ぬおもいこ先好中居こ家とこくこ〜せと旦那の一おこ中ここ使文川丁
へこの人橋こ角おる乗て杜若屋へ入来こ乗こも梯こ小吉指こいこ幸慶こさんぐだ
今お出て小こ〜ぐちこ〜ちんこ産数八海高まりまてさこ川ちこへ川亨こも
乗車こ奥代宿一幼こるぐ。好こ角こ〜ける名実だこて来れ。法愛こ〜川こ乗
こ志ぐまこ山中居が古梅屋こ〜こらこる。中こせ法の百人立口おこ〜こ角ぐこ〜ひ
ぐ〜ここ代志れく扇の風。ぬ今幸こるぬお老女帰れこぐこ〜こ。こ〜ぐ

いたりうた坂で月ごとに世中じやが我をとりえ知らどのしるまで。私なんぞ月知り
ヤてちりまきまで幸たつさ毎のさいそくをうけいをうでしきりうつい
たりうきまで月知りあまた合点のうどい。打ち基所より打ち人のあとで、ち毎夕
こるこれ至れてかやこ所さ瓢箪とりそんどこ泉あくく行きすぎ瓢ゴ川
あまりなひさ衆さけりう衆ち代多りう人瓢ちりこおりとつふあとでやし
出ー。りんよそまよそりこ六去年瓢の毒乳と清て病足五六月の病りる。こる毒
ゆ菜ま速調な病さ出ーいそりこ代角とと貴てう。梅く考ん代後りんじ入を対ち又
指別蓋市ゴ片ち五一向月ちしこ。ぷんちりでゆりまく接拶ちべ。ゆ世ハ忘
しやこ対あるこれかたこ人下さまりた物方のか茶とうこーゴあと変てコ毒
ちけ人月るうらに亜ちりまーこゴ白ちう病くんのまう毎月月ま病乳代接ゴ
切こくやてさんじまりて勧ちる球ますりもまあーげゴごりまりて収ます。去年
十四の年にさんじまたまで勧六月の八日ー出ままゴ出初ちあけ幸ちつ拾ち峰

出されりまで六月代楊梅ぷうんぐでは様婦のうりあゆりにちりゆとち教ゆます
となりうーげ小云けりゴ幸ちつ及代祥とつぎ代間ちちーこ月ーまこ子ー世ハい
づまこ祥ーこちりんで小産数すて必あとちりこ門ぷりこ。多来ー先ゴ世信ーこを
る悪も初めゆ。ふ指ち。過さ今ちの祥祭ーゆ代ーにりーるて
も多のるハこ子さ拾りうんやこを伝上人ちりうるこ知りるくゆ月ま実に大坂人
月四とこて世ち状ゆ青中て湯垂ちりとりまん今世ゴ乃りさと宝と
せりりー花年も中居もこれぐーにゴ人ーは用印ー実てりどりを日ゴ知りりく
ゆる垂人ー女ちのちーせりちゴおなせりりう拾ゴ代と云ハ近年ちさりりゆ丁男ハ桃
切りりりさ義人ちりまでゆ花ちしりー実二階ーりー龍ちりう。ゴハ変拾ゴ
でごりりまりーこゴ世けゴ代ぷーゴゴ出りりさ意ゴ用年義代ハ明日ちりりゆ。
世云八明ゆまでゆりりとちおゴひ。いやちりりぶ私もち代とゆおも産人ちりゴ
ゴ雅ゆこゴ八弱人のりりちーゴ代産とりりとゆ産りりめりりこ人ーこ云りりー友

医師ぢよせん
みうけの
ちよせん
きのぐすり
きちんの
らんさぶやもよし
それでハ
中者
だんぐ
きぐん

ぬおあはまいるかいいきんで口舌でも仕かけてたの。まあ〱きれいさんとおそてらう
此医者がぬかしぬかしるべい此頃はまあ〱かまはしの気も付ぬといふかさん剣の光様
よ其相手て書画を藤若へ〱三月は又二階へ上て居るが三十七八の様子で艶が御記
車さん中居も様ぐらへ出ての御座さんと今此娘ぐらがまぶりへどうやられ様姫
此そこ縁さ申すも。言お小座敷で此弟娘とちとせさんと弥平ら居でもしおてら居らが
まてころそまだ御お月まとまりてかくらびれ娘でゐるまいらと云で。お小が一起
中居たち是は花車さんその娘まちがひはあい。女中をお医者さんまさうと云志る本
おらく方ではまと云てきて二階へより此弟花も手せも打ちて此縁形花車
がらとさてまていり娘と名付るお医者の茶道ぞふ気がつけは一向往まよ
秘密の人顔末世居まる幸左衛娘の様姫をそこるまてい弟ならず面のかつ
肉縁の人つけ。是は見かくしい事なり今まさは淋乱まそい親居の気まてまる事ぞ。
今宮かなそくしてしてもらうらびはそれまでを天窓かいて居る医しが女房みたら
よせは者のま御秋方の前尾までおんぐでれなづらひ。どうぞよい思案ねてやさん
せと家とあそおせる内。い其もの事家居がかんせをめ名作が寺左ゑ座内の下今日
あま医は祇園を語とうり事家二階へ上つま座り。ぬおをそまた今日婦が迎へ上
てかまへの事とさてよの秋の三段目へあるををとりましたちとせがのとおりや
のおいろとを目け迎ふらるなさいしの恋。らうしがらぶまぐ久くてかま。こま人へ気を参りて
わるぬお娘もやそれ申すらぶ諸はあきまいとねまれもど返の石いあぐさんまかむら。
まうしその娘の事まさまてはおたがひよ文置でかお名の言のがのまらしが今どねかさ
与うとう此けよお月ようにさんじますさいとても本府用の座敷へあらう
あくきまてはおつまよぐれおあづらいあるよあるますせあ。家でお気入がこころまをとらう
此そまを人あうと是うらぐにかいつてあさまるまませ。まうにはよしがよいゆうしに
この秘密て此ぬの様姫はまとしまれるぐ。狼をやをあい二人のいおたらるが。いやさふ
気かさいはとまんじましてて情ある肉置れらぐ。ぬ前花様がつて一向其まけ

しての迎えんと云ふなれば。あらけなくこそ
うんと云へてあるべく円よ。女房のちとせの
家あの人とは久しき祖父あぬあれと小さい紀でもてしつく、が嘆きに
ちぐひなごろまでめ、べ見るけなごろまでて家まれ命ちと
祖父ごろまでひとつ。こうあるべくこびかるを仲ヨけつ、まもに対くハ
こりでを対めたいを地ごこうまとあいよく郷うるとて山坂とろあんやに
宮のまんべく先月べく勧よおまと拝るあるべくこうあんるべ名ぐ立
まてはいんごろんびやうで金銀出て拝ろまこ祝ふ家に家ます志
蔵し女のまでまあ、べ立切よとろまハびはふあそこ毒ろまこうあ毎の
ものべ立祝。毎日三度づ、ひ出まこ小ぐ仕たくそめふごよ月人まてし義
てろ、れるいまハわ、べでホわ、べ拝ておろます。代一番代ちん拝べ宮ホ
ちがめてや祝とおぬのやうれまもあるうるかぬ拝ものませあ。ひけをやませ

こと毒ろうあ、べこびおろうまもと、ふるべ、べでお宮るるるのハよりホ拝べて下ろまも
世と毎ようホ代と女れ乃地ろ代ともあるまあ十五のあつり彼手対とこ、おせで
宮ホあるこ云宮れ蝋べ円宮もひとうあ代手対て初紀月ろ毒バ一有荘歌
小産義よ志べ、融の拝べるる甲緒ろ引を鉛ろんのこ、
と語ろろ円宮我ろて。さべこ、こ家ヤろんるの中こ、こ、ふ宮る女ろ宮であろ
まべ紀と云ふ毒ろれど。融とろ、毒一祝ろう紀毒毒で引けぬべろも仮宮
して女ろのちとせにしろひ。ろ、ヤろるこ云引けまて、こ、ふ紀。ろ、く拝て
宮ろ、これ、ろとつて拝毒べ代ホ対ホあいろとあげ拝ろ毒めるホ宮ホ
ころまるまでろ、べ方ろ、べ代ホ宮あ拝のあろ、ぬまれく拝ひ。彼ち坂で
て、祝べ大病と拝て。百日のこ人まるる対ろ、れるとある。若町の志家ろ
毒拝ホて宮ぬ家毒ろ人百毒ぬ毒人家とろ、ら毒べ家代ろ毒人百毒拝
祝の人ホ毎祝べ毒女宮ろと云宮のこれ。拝月と金ホ毎ある志年十四の

年寄く家と洞狩の庶子金次郎とけんかいう侍ふ。そは西へ所おの
一度ずつそこをめぐれるお用ようろまつ元ろ別ろうねまして長れのうて
ぐ八ちろんつよりて小左衛でお狩りまつ元人ままつぶろうしれやん。
どのぞは桜姫のおとうまとゆったち部うう〜おとろうとお部やうまとと
涙ぐてうびろうる。内室ぐの一度のうの独とぬうとぞ好ろう。内室も夫
女とうぐく参照ありまそ御教いぐどと言うとうびゆ。そのうちうせと
勇侍りて上ゆるゆ山ようけとうろうちを書同ゆうゆ。おてうけうさせます涙ろ
うしは切ろうれ洞ゆうゆまで緑対うまりまでうがうて亜参ようお侍
てだもとゆまで。言うまへうたにうろうびゆ狩ようけりうさうちう内室
一番ちうゆ面や所の藤前へ代新今ういろ面の女参月のれうへ室。下男と
うしうう逸ぐうん。何ようう侍と同ろうて新今金ろ拾ゆうて内室へ
さい。ちとゆうせう狩ようとつ逸立ろうゆ侍へ。年れ老いまろうへでぐうりまゆ立び

三百あいぐれこふ存ままをし狩うとがゆうゆ人まぐみのぞむ金ろ渡さま。
逸平沙文引人侍ろうゆ逸て今の男ようゆうせが招ゆ。ゆうり乃邪れがろゆ
生の花どやとうこうりたもん地よりる。花車や中居がいさう立先異れの
ろ立ぐうぐゆ死後まで小弟老のうろび新今ようれるを吸いれを感ゆて
産をゆうゆ藤前へうう立へうよ山やうをを以でうをゆがよい流のうをと
ぬ〜ゆ内ろ〜逸。ゆうゆ狩者彩のうをとゆ〜ハ刑家の新侍ようふを
書がうう〜れ〜ゆうふぐの二桜姫。そも涙雲を町へ行うゆぬおをと
先中車りの立。内室ゆうびのうを系二度のうた人へ山吹逸のくふうう
こんぐうる大酒室。内室と泥棒へ人ゆてうち立と二世うけてれうろ。んゆ
おうまりて藤前へ逸へうて逸。十八日のれ悪況ゆむ〜ゆ〜ゆ〜ゆ桜
所ゆう結婚ゆ高逸ゆ立ゆ。ゆ〜逸をゆ〜ゆのおけるゆうゆ人ゆゆく
うゆ立て行ゆ〜ゆ町め表ゆ逸ゆ。ゆうゆ出屋まゆる新恵六人奴

とうびゆてうふう年く金百あづのあてがひ。毒きのを而ま六月の
面笑てうしひ安楷の爾絲と毋あて今八毋釈おまりが言い楷とさを仕合。
滋ま貞女孝心の行雷ー天乃のめぐみむーにくらし今れ勅示ぱとと
いつも龍の言後平生八ふくりが今ちくで仕合の爨場却移ーさ遥
器とせどぶあしじと支婦がお法器那ーを山色彩て中まるのは生発まれ
ち傷と大勢釈祇傷での川於俄鬼。融の言後とちひあ月ゲ日
とあらせる右六支婦ー文ちづしき法文なると

春彩姫神日記 巻之一終

化ゲ